

Mon Nara



Numéro305 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会

JUIN 2024 6月号

第 155 回フランス・アラカルト「古民家と写真を語る」

5月12日(日)、生駒セイセイビル会議室に、会員13名とフランス人ゲスト4名が集まり、宇陀でフランスの仲間3名と古民家の修復に取り組むコリーヌ・アギーレさんのお話を聞きました。通訳の流暢さにも助けられ、進行もスムーズに進み、質疑応答が活発に交わされました。高校時代に日本に来て、着物の美しさや田舎の家屋の居心地の良さに目覚め、その後写真を専攻する学校のインターンシップで再来日、そして6年後に、再び宇陀に来られたとのこと。当初は、ゲストハウスを中心に、料理教室、アートギャラリー、フォトスタジオ開設を計画していたが、現在は、着物のネットショップ、写真家の仕事、日本での活動をめざす外国人への支援を考えているとのこと。



子供の頃の写真を紹介するコリーヌさん

驚いたのは、コリーヌさんの物怖じしない活発な生き方、また思い切った決断をしながらも柔軟な発想で状況にうまく対応されていること、さらに、日本人以上に日本の伝統を大切に、着物の現代的な着こなし方を考えていることでした。(杉谷健治)

第155回フランス・アラカルトに参加しました。ゲストは、コリーヌ・アギーレさんで、テーマは「古民家と写真を語る」でした。コリーヌさんは、パンツスタイルに羽織をさらりと着ておられました。講演は、まず生い立ちから。フランス国内、さらにはアメリカと日本の高校への留学も含めてなんと10回以上！3度目の来日が、今回で昨年からは宇陀市にお住まいです。何故宇陀なのかとの問いには、気に入った古民家があったからときっぱり。VISA取得のために、民泊やキッチンスタジオ、フォトスタジオを作ることを計画しますが、現在は、着物を売って、着付けや撮影をしたりする仕事をメインにしていくとのこと。参加された方の中には、100年、150年の古民家にお住まいの方々もおられて、活発な意見交換がありました。若い海外の方が日本に、しかも古民家に住んでくださることは、素晴らしいことです。彼女の行動力にブラボーと言いたいです。さらに、通訳を務めていただいた林薫子さんの流暢を超えた通訳にもブラボーでした。(本田倫子)

「Je suis photographe 私は写真家です」というのがコリーヌさんの自己紹介でした。2月11日、4人のフランス人の若者が「菜宴」に到着し、短い挨拶を交わしたときのことです。懇親会が始まったあとは、テーブルが離れていて、4人とほとんど話す機会がなく、次の日にコリーヌさんから丁寧な礼状メールが届いたときは驚きました。そこで初めて、コリーヌさんこそが4人グループの中心人物であること、そして宇陀の古民家を購入したのもまさに彼女であることを知りました。ここから私にとって、コリーヌさんはただの写真家ではなくなりました。メールのやり取りを経て、4月14日に理事メンバー6名で古民家を実際に訪問し、5月12日のフランス・アラカルト開催に至りました。コリーヌさんは、写真もみごとに撮影しますが、なによりも自分の夢を明確に抱き、その実現のためには困難を着実に解決していくすばらしい行動力と、人を惹きつける魅力をもった、若き起業家だったのです。(三野博司)

Je suis ravie de l'ambiance globale, les membres de l'association sont très accueillants et curieux ! J'ai été très intéressée par les questions qui m'ont été posées, j'y ai trouvé beaucoup de plaisir à répondre. Le choix du lieu était selon moi très bien, proche de la gare, petite salle à taille humaine, du matériel qui fonctionne. Je n'ai qu'une seule chose à suggérer, ayant très vite mal au dos une fois debout, j'aurais fais bonne usage d'un tabouret sur le quel m'appuyer lors de la présentation. Mais cela est une remarque très personnelle. J'ai eu une très bonne expérience globale ! (Coline Aguirre)

全体の雰囲気はとても素敵でした。会員の皆様に温かく受け入れてくださり、いろいろと質問を投げかけてくれました。とても面白い質問ばかりで、答えるのがすごく楽しく思いました。選んでくださった会場も、駅から近く、広さもちょうど良く、設備もしっかりしていました。ただ、一つ問題だったのは、立って話し出したらすぐ背中が痛くなったことで、椅子をうまく利用すればよかったと思いました。全体としてはとても良い経験となりました！

(コリーヌ・アギーレ)



第62回奈良日仏シネクラブ例会（2/25）報告

◆◆『思い出のマルセイユ』は、マルセイユのサン・シャルル駅に降り立ったイヴ・モンタンが、駅前の階段で歌って踊る場面から始まった。この駅には私も何度か行ったことがあって懐かしい。映画は驚くような物語の展開だったが、最後は再会したカップルと娘が同じマルセイユ駅の階段を上っていく場面で終わった。同じ場面から始まって同じ場面で終わるとするのは魅力的な構想だと思った。イヴ・モンタンの年をとっても素晴らしい歌声としなやかなダンスは素晴らしい。監督のジャック・ドゥミはヌーベルヴァーグのシネアストだが、ヌーベルヴァーグといえば、ジャン＝リュック・ゴダールの『勝手にしやがれ』（1959）で知られるように、当時スタジオで制作されるのが当たり前だったのを一気に外の世界に飛び出したことが画期的だった。今回ドゥミの映画をみたことがきっかけで、私はモネの絵画を思い起こした。フランスの美術界は17世紀頃から宗教画や神話を元にした題材で室内で描かれる作品が中心だったが、モネはブーダンの影響のもと戸外に出て風景画を描いた。絵画における「印象派」と映画における「ヌーベルヴァーグ」の共通点に思い至った。ドゥミの作品のどのところがヌーベルヴァーグであるのか、まだあまり理解できていないが、機会があれば他のドゥミの作品も見てみたいと思う。（小寺順子）



◆◆ 少年時代、学校をエスケープして、映画館に一人で行くようになって、ジャック・ドゥミの『シェルブールの雨傘』や『ロシュフォールの恋人たち』に出会い、たちまち恋に落ちた。初公開後10年も経っていなかったのも、ほぼリアルタイムで夢のような映画体験をしたのである。初恋の思い出を確かめたくて、『ロバと王女』『ハメルンの笛吹き』『モン・パリ』そしてあの『ベルサイユのバラ』まで見てしまった。しかし、やがて思い出も色あせていき忘却の彼方に消えてしまっていた。

今回シネクラブのドゥミ・シリーズで取り上げられた長編第一作『ローラ』から30年経っても何も変わっていないあのジャック・ドゥミの映画。港町とミッシェル・ルグランの音楽そしてカラフルな色彩に彩られた彼の遺作『思い出のマルセイユ』は、今回が初見だった。ようやく真のジャック・ドゥミ映画と再会できたようで嬉しかった。薄幸の母娘、昔の恋人たちや本当の父親との再会、彼の映画の定石が配された物語の構成に、カタルシスを感じた。それは、イヴ・モンタンがマルセイユにいたかつての恋人を探し求めて再会するというこの映画の物語が、観客とジャック・ドゥミとの間に共有される物語と重なり合うからではないか？ ということに、真のジャック・ドゥミの映画を探し求めていた僕が、『思い出のマルセイユ』を観ながら気づいたからかもしれない。本作はイヴ・モンタンを迎えて、彼の魅力とハリウッド・ミュージカルのトリビアが散りばめられていて、繰り返し鑑賞したい作品だ。（吉村公彰）



第63回日仏シネクラブ例会案内：ルイス・ブニュエル特集①『小間使いの日記』

- ❖ 日時：2024年6月30日（日）13:30～17:00 ❖ 会場：奈良市西部公民館5階視聴覚室
- ❖ プログラム：『小間使いの日記』（Le Journal d'une femme de chambre, 1964, 94 分）
- ❖ 監督：ルイス・ブニュエル ❖ 参加費：会員 200 円、一般 300 円
- ❖ 問い合わせ：Nasai206@gmail.com tel. 070-1731-0230（浅井） ❖ 予約不要
- ❖ ノルマンディー地方のブルジョワの家に、パリから小間使としてやってきたセレスティーン（ジャンヌ・モロー）。家の実権は夫人がにぎり、婿養子の夫（ミシェル・ピコリ）は無能な恐妻家。夫人の父親の隠居老人は、セレスティーンを部屋に招き入れ彼女にブーツを履かせて悦んでいる。ブルジョワジーの隠微な実態・モラルや官能のあり方が、セレスティーンの眼を通じて暴かれてゆく。ある日平穏だった田舎町でレイプされた少女の遺体が発見される。パリに帰ろうとしていたセレスティーンは少女の事件のことを聞いて家にとどまる。彼女のとった行動は…？ 音楽はいっさい使わず、列車の音・馬の蹄・教会の鐘などの現実音を豊富に使用。1900年だったオクターヴ・ミルボーの原作の設定を、監督のブニュエルは1928年（『アンダルシアの犬』が発表された年）に変えている。本作品を通じて、当時のヨーロッパ社会の動向へのブニュエルの批評的視線も読みとることができる。（浅井直子）



第8回美術クラブ例会：モネ展鑑賞会（3/14）報告

◆美術クラブの第8回例会は、大阪中之島美術館の「モネ」展鑑賞会。3月14日（木）、平日なのに、チケット売り場には長蛇の列ができるほどの賑わいで、モネ人気の高さが実感できました。会員12名が参加、ナビゲーターの浅井さんから鑑賞のツボの解説の後、各自展覧会を鑑賞、その後、近くの大阪大学中之島センター内「カフェテリア・アゴラ」で、意見交換会を実施しました。モネについては、これまでそれほど関心がなかったのですが、絵を眺めていてなぜか心地よい安らぐような気持ちになりました。「ザン川の岸辺の家々」の水面のゆらぎ、「ヴェトゥイユの春」の草叢、「プールヴィルの断崖」の岩肌、「ジヴェルニーの積み藁」の積み藁など。色を混ぜるのでなく並列することで新しい感覚を湧き上がらせるとの解説がありました。たしかに近くで見ると粗いですが、遠くから見ると動きやリアルさを感じられます。なかにはそのぼかし方が極端になった絵もありましたが、意見交換会では、そんな芒洋とした絵が好きという声もありました。また、モネの絵は日本の侘びさびに通じるものがあるとの意見もあって、私が感じた心地よい印象の理由が分かったように思いました。（杉谷健治）



◆快晴のホワイトデーに、中之島美術館で開催中の「モネ展」へ行ってきました。平日で閉会までまだ日数があるにもかかわらず、大変混雑しているので驚いてしまいました。入場チケットを購入するために長蛇の列ができていて、10分以上も並んだほどです。日本でのモネの人気の高さを、改めて実感いたしました。モネといえば、ジヴェルニーに思い通りの庭園を作り、絵を描きながら悠々と過ごしていたというエピソードで知られていますが、そんなモネにも若いころには経済苦の時代があったと知り、とても意外でした。会場では、藤を描いた絵が一番好きだと思いましたが、（撮影が許可されていて）撮影した写真を家で眺めていると、二つの睡蓮を描いた絵が幻想的で一番素敵だと思えました。まだ無名だった時代から晩年まで、モネにだけ焦点を当てた大変興味深い絵画展でした。（竹中美穂子）

◆今回のモネ展で印象に残った絵画の一つが、ジヴェルニー地方の積み藁を四季にわたって描いた《積み藁》の連作です。昨年ジヴェルニーを訪れた時、同じような積み藁を見かけ、今も変わらない風景だと感銘を受けました。同時期の画家ミレーにも積み藁を描いた作品がありますが、前景に農民が大きく描かれ、人間が中心となっています。モネの場合、自然風景が中心で、とりわけ《積み藁》の夏の場面では、藁の手前に座っている母親と子どもが眼を凝らして見ないとわからないくらい風景に溶け込んでいました。モネも肖像画のような人物像を描くことがあっても、風景画においてはあくまでも自然が中心で、天候や異なる季節、異なる時間を通して、その一瞬の表情や風の動き、色の変化を追求し、そこに彼の新しい視点が見出せます。意外だったのが、モネが最初に描いたのがカリカチュア（しかも精巧なもの！）だったことをナビゲーターの解説で初めて知りました。（村田京子）

◆モネは子供の頃から86歳まで生涯にわたって描き続け、「鳥が歌うように絵を描きたい」という言葉が知られています。描きたいものが次々に浮かんでは、自分の感性と同時代の技術を駆使して絵に表わし、一つの作品の完成は新たな可能性や未完成作品の啓示となり、すぐに次の作品に取り組んでいたような気がします。「連作」をテーマにした今回の展覧会では、モネの生涯に沿って連作に至るまでの作品が展示され、彼が「いかにして連作を生み出したか」を、鑑賞者自身に発見させるような工夫がなされていました。水に映る空・雲・樹木・家々、教会・田園の様相、ぼんやりした輪郭線は、早い時期の作品にも表わされていました。連作のモチーフに「積み藁」や「大聖堂」などフランスの伝統文化に関わる対象が選ばれていたり、品種改良の成功で1889年の万博ではじめて世にお目見えした色鮮やかな睡蓮を見て、自分で育てることを即決し自作品のモチーフにしたことなどから、モネが伝統と革新を洞察して作品化する力の持主だったことがわかります。画家の人生を辿りながら、一枚ごとの絵の表面や奥にある可能性や他の作品とのつながりを考えると、想像世界が広がります。鑑賞会での意見交換や、その後のワインを飲みながらのとりとめないおしゃべりは、絵画鑑賞の楽しさをいっそう深めてくれました。（浅井直子）

画像はすべて図録『モネ 一連作の情景』より

十津川からボンジュール

ジョラン・フェレリ

Bonjour à tous. C'est Jolan qui vous écrit depuis les fins fonds de la préfecture de Nara ; depuis le village de Totsukawa. Cela fait longtemps que je n'ai pas écrit pour "Mon Nara" et je me permets donc de vous donner de mes nouvelles.

Cela fera bientôt 10 ans que je suis arrivé au Japon, ayant quitté les montagnes iséroises pour... Les montagnes de la péninsule Kii. 32 ans cette année, dont 10 passées au Japon. J'ai pourtant l'impression d'y avoir vécu toute ma vie. 10 années qui sont passées si vite, et si doucement à la fois. Hmmm...

Après avoir travaillé 3 ans en tant que bûcheron, je gère maintenant un parc en hauteur qui se rapprocherait de ce que l'on appellerait un accrobranche. Le parc, nommé Kuuchuu No Mura, a ouvert ses portes en avril 2020, c'est donc sa cinquième année. Avec l'aide de la mairie, nous avons aussi créé un camping de nuits insolites juste à côté de l'accrobranche. Une offre d'hébergement composée de cabanes dans les arbres, de tentes suspendues et de dômes transparents. Le camping a démarré en juillet 2023 et cela fera donc bientôt un an que des visiteurs de tout le Japon viennent passer une nuit en forêt.

Le parc en lui-même reste très difficile d'accès, mais l'ensemble de l'équipe et moi-même travaillons dur pour maintenir les installations et promouvoir ce lieu (Dieu sait que les réseaux sociaux et moi faisons deux...Et pourtant, il faut bien s'y coller).

Récemment, de nombreuses personnes m'ont invité pour venir voir leurs forêts / parc afin que je leur propose des solutions pour occuper l'espace arboricole. Les demandes sont variées : du propriétaire individuel, au parc à thèmes géant, en passant par les collectivités locales. Outre la gestion de Kuchuu No Mura, l'agencement dans les arbres m'a toujours plu, c'est pour cela que je souhaite sincèrement mettre plus d'efforts dans cet aspect de conseil et de construction.

Vous, qui lisez ce message, n'hésitez pas à venir me voir à Totsukawa. Cela me permettra de pratiquer mon français... Que j'ai tendance à oublier. (Jolan Ferreri)

こんにちは、みなさん。奈良県の奥地、十津川村からメッセージを送っているジョランです。久しぶりに「わたしの奈良」に記事を書きますので、近況をお知らせしたいと思います。

フランスのイゼールの山々を離れ、紀伊半島の山々を目指して日本に来てもうすぐ10年になります。日本で過ごした10年を含めて今年32歳。それでも、私は一生そこに住んでいたような気がします。とても速く、そしてとてもゆっくりと過ぎた10年。うーん...

3年間木こりとして働いた後、私は今、樹上アスレチック施設と呼ばれるものに似た高地公園を管理しています。「空中の村」と名付けられたこの公園は、2020年4月に開園して、今年で5年目になります。役場の協力を得て、樹上アスレチック施設のすぐ隣に、新奇な夜のキャンプ場も作りました。ツリーハウス、吊り下げテント、空が透けて見えるドーム天井で構成される宿泊プラン。2023年7月からこのキャンプが始まり、日本中から森で一夜を過ごしにくる人たちが訪れるようになって、まもなく一年になります。

公園自体へのアクセスは依然として非常に困難ですが、チーム全体と私は、施設を維持しこの場所を推奨するために、一生懸命働いています(私とSNSが別人だとは誰にもわからないでしょう…。でも頑張らなくては)。

最近、私に樹上空間を用いるための解決方法の提供を求めて、多くの人から森林や公園を見に来ないかと誘われます。個人オーナーから巨大テーマパーク、地域コミュニティまで、要望は様々です。空中の村の運営の他にも、樹木の配置には以前から興味があったので、そうしたアドバイスや施工にももっと力を入れていきたいと、私は心から思っています。

このメッセージを読んだあなた、ぜひ十津川に会いに来てください。私もフランス語を練習できますし…。このところ忘れがちなので。



「空中の村」 <https://kuuchuu-no-mura.com/>

宇陀での生活

グレゴワール・ムニエ

Bonjour chers lecteurs de Mon Nara. Je me présente : je m'appelle Grégoire, je viens de France, et je suis au Japon avec un visa vacances travail. Je vis à Uda avec mes amis, dans une vieille maison (kominka) en rénovation. Nous avons rencontré les membres de l'association franco-japonaise de Nara lors du repas de Noël à Méli Mélo (restaurant de galette et crêpe à Murô). C'était très amusant !

Grâce à mon visa, je peux travailler au Japon. J'ai donc eu l'occasion de travailler dans une menuiserie. Mon travail consistait à éplucher des arbres. En suite, j'ai eu l'opportunité de travailler à Rui Nou En (類農園), une ferme agricole, durant le mois d'avril. La ferme étant située à Haibara, je m'y rendais à vélo depuis Utano. Tout d'abord, j'ai été très surpris par l'accueil chaleureux de tous mes collègues, malgré la barrière de la langue. Durant toute mon expérience de travail, mes collègues ont tous été très gentils et m'ont beaucoup aidé. J'ai appris beaucoup de choses, c'était très intéressant ! J'ai pu faire différentes tâches, comme préparer les champs avant de semer les graines, récolter des épinards, ou encore mettre les légumes en sachet. Le but de cette ferme est de produire des légumes entièrement biologique.

Durant mes premiers jours de travail, la barrière de la langue a été difficile pour moi. Mais grâce à la patience et la gentillesse de mes collègues, la communication était possible et je comprenais les instructions. Au bout d'un mois de travail quotidien, j'ai grandement progressé dans ma pratique du japonais et je suis plus à l'aise pour échanger avec mes collègues, notamment sur la France et les différences culturelles.

Au début du mois de mai, mes parents sont venus me voir au Japon. Nous avons fait du tourisme ensemble, notamment dans la région de Nara que mes parents ont adoré ! Nous sommes aussi allés à la ferme, car je souhaitais montrer mon travail à mes parents. Ils ont également été surpris par la gentillesse de mes collègues ! En France, il est rare d'avoir une ambiance de travail aussi bonne. Ça ressemble à une petite famille ! Ça a été une expérience très enrichissante, j'ai hâte de retourner y travailler pour le mois de juin !

(MEUNIER Grégoire)

Mon Nara 読者の皆様、こんにちは。自己紹介をさせていただきます。私の名前はグレゴワールです。フランス出身で、ワーキングホリデー・ビザで日本にいます。私は友人たちと宇陀市にある、改装中の古民家に住んでいます。私たちは「メリメロ」(室生のガレットとクレープのレストラン)でのクリスマス・ディナーの時に、奈良日仏協会のメンバーたちと出会いました。それは非常に楽しかったです！

ビザのおかげで日本で働くことができます。そこで大工の仕事をする機会を得ました。私の仕事は木の皮を削ることでした。それから、4月に「類農園」という農園で働く機会がありました。農場は榛原にあるので菟田野から自転車で行きました。まずはじめに、言葉の壁にもかかわらず、同僚全員が温かく迎えてくれたことに、とても驚きました。仕事全体を通して、同僚は皆とても親切で、私を助けてくれました。とても勉強になり、とても面白かったです！種を蒔く前の畑の準備、ほうれん草の収穫、野菜の袋詰めなど、さまざまな作業を行うことができました。この農園の目標は完全有機野菜の生産です。

仕事を始めた最初の数日は、言葉の壁は私にとって大変でした。しかし、同僚たちの忍耐と優しさのおかげでコミュニケーションが可能になり、指示を理解することができました。一箇月の毎日の仕事の後、私の日本語スキルは大きく進歩し、同僚と特にフランスや文化の違いについて話し合うことに抵抗がなくなりました。

5月初めに両親が日本に遊びに来ました。両親が大好きな奈良地方と一緒に観光に行きました！両親に自分の仕事を見せたかったので、私たちは農場にも行きました。彼らも私の同僚の優しさに驚いていました！フランスではこれほど職場の雰囲気が良いところは珍しいです。小さな家族みたいです！とても充実した経験だったので、6月にそこで仕事に戻るのが待ちきれません！



室生の「メリメロ」でライブ演奏 リュドヴィック・ベン・アーメッド

Le dimanche 2 juin, j'ai eu l'occasion de jouer en live au restaurant de galette « Méli-Mélo » à Murô, tenu par M. et Mme Chabrol, où j'ai rencontré quelques membres de l'Association Franco-Japonaise de Nara. C'était la 5ème fois que je jouais dans la préfecture de Nara.

Je m'appelle Ludovic Ben Ahmed, je suis auteur compositeur interprète originaire de Bourgogne, et j'ai donné plus de 170 concerts au Japon depuis 15 ans. Actuellement je réalise un projet de création et d'enregistrement nomade d'un album, qui traverse plusieurs pays, dont la France, le Japon, le Maroc et l'Italie. Ce projet s'appelle "Les Montagnes Bleues" ou "Aoyama project". C'est pour cette raison que je suis actuellement au Japon.

Le site a une interface en japonais, je vous invite donc à découvrir mon travail par ici : <https://linktr.ee/ludovic.muse>. En 2021, j'ai composé une chanson intitulée « Le Papillon et l'Aubier » et collaboré avec une calligraphe nommée Tohkei (桃蹊) Naomi Yanai, dans la ville de Nara. Ci-dessous quelques extraits. J'espère que j'aurai l'occasion de me produire à nouveau à Nara. (Ludovic Ben Ahmed)

6月2日(日)、室生のシャポールさん夫妻が経営するガレットのレストラン「メリメロ」で、ライブ演奏をする機会があり、そこで奈良日仏協会の会員の方たちと出会いました。奈良県で演奏するのは今回で5度目でした。

私の名前はリュドヴィック・ベン・アーメッドといいます。ブルゴーニュ出身のシンガーソングライターです。過去15年間に日本で170回以上のコンサートを行ってきました。現在、フランス、日本、モロッコ、イタリアなど数カ国を横断するノマド的なアルバム制作とレコーディングの計画を進めています。このプロジェクトは「蒼い山」または「アオヤマ・プロジェクト」と呼ばれています。私がいま日本にいるのはそのためです。

インターネットのサイト <https://linktr.ee/ludovic.muse> に日本語訳がありますので、私の活動を知っていただければと思います。2021年に「蝶と白太 Le Papillon et l'Aubier」という曲を作り、奈良市で桃蹊 Naomi Yanaiさんという書道家とコラボした時のことも紹介しています。以下にその抜粋を掲載します。また奈良で演奏する機会のあることを願っています。

Pouvoir venir travailler en résidence à Nara chez Tohkei Naomi Yanai, amie artiste et calligraphe, dans son Ryokan, est une chance inespérée pour mener à bien cette aventure des Montagnes Bleues. Dans cette vaste maison on a le sens du lien, de ce fameux « go-en » qui peut signifier chance, lien ou bien encore destin. Ici on ne court pas après les choses ni après les êtres : il y a des liens à nourrir et d'autres que l'on doit apprendre à laisser tomber, c'est aussi simple que cela. Cette maison est située dans le pays du Bouddha et Naomi-san est imbibée de cette vision de l'interdépendance de toutes choses.

Celui ou celle qui a une perception fine peut, dès son arrivée ici, déceler les deux odeurs qui flottent en arrière-plan dans l'air et qui sont comme des mémoires imprégnant les lieux : celle du bois, et celle de l'encre. Le bois qui est au cœur de la vie de cette région, le bois duquel on construit des maisons et des temples, le bois que l'on sculpte. Le bois ici c'est toute une histoire et j'aurais l'occasion de vous en reparler plus en détails une prochaine fois, il y a tant à en dire. Et puis l'encre donc, comme une respiration essentielle, quotidienne. Voilà donc des choses qui me lient à Naomi-san, moi qui de ma petite et douce encre écrit des chansons et qui suis amoureux des arbres et des forêts. C'est donc avec une claire vision que je savais devoir écrire une chanson en relation avec les arbres en venant ici.

書家の友人・桃蹊(とうけい)さんが営む旅館に滞在して活動できることは、この冒険的な「蒼い山」プロジェクトにとってかけがえのない幸運でした。この宿には「ご縁」の意味が感じられます。ここでは人や物事を追いかけない、つまり育むべきご縁は育み、そうでないものはそっとしておく術を学ぶ、そんなシンプルなこと。仏の地・奈良の中心地にあり、「全てが因果関係にある」というヴィジョンが、桃蹊さんには浸透しているように思います。

感性が鋭い人であれば、この旅館に着くなり感じとれるでしょう。場所に染み込まれた遠い記憶のような、空気に漂うような、二つの香りを…。それは「木」と「墨」の香りです。「木」はこの地域の生活の中心にあります。家やお寺を建てるための木、彫刻にする木。そして「墨」は日常のもの、必要不可欠な呼吸のようなもの。木々や森を愛し、インクの細い線で歌(シャンソン)を書き綴る僕。尚美さんと僕を繋ぐのは、これらの要素なのです。だから、奈良に来て「木」をテーマに曲を「書く」べきだ、という明快なヴィジョンがありました。



奈良日仏協会入会とサン=マロ語学研修 堀内曠子(ほりうち ひろこ)

私が奈良日仏協会に入会したのは今から 30 年前に遡ります。1994 年 4 月 23 日に奈良市の老舗料亭「菊水楼」にて行われた発会式に参加し、以来ずっと会員を続けています。当時、新聞か何かの記事で奈良に日仏協会ができることを知って、入会を決めました。それまでは、京都の関西日仏学館に通ったり、自分でフランス語の学習を続けていたので、奈良に日仏協会ができるというのは朗報でした。

フランス語を学び始めたきっかけは、ジェラルド・フィリップの映画に惹かれたことです。ダニエル・ダリユーと共演した『赤と黒』(1954) は、学校から連れて行ってもらい、とくに印象に残っています。戦後の暗い時期を経てカラーの映画を観た時、目の前が明るくなったような気がしました。大人になってからは、彼の映画を観るためによく映画館に行きました。彼の話すフランス語は本当にきれいでした。もともと演劇学校で基礎的な訓練を受けて舞台で活躍していた俳優さんなので、何気ない日常会話の話し方もきれいだなと感心しました。個人的に言葉に興味があったので、映画の台詞に敏感だったせいもあるかもしれません。私自身ボランティアで朗読をしていたこともありました。

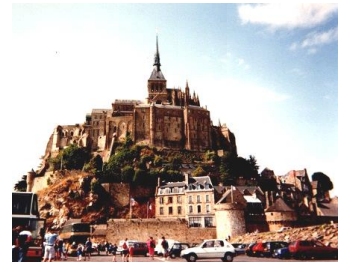
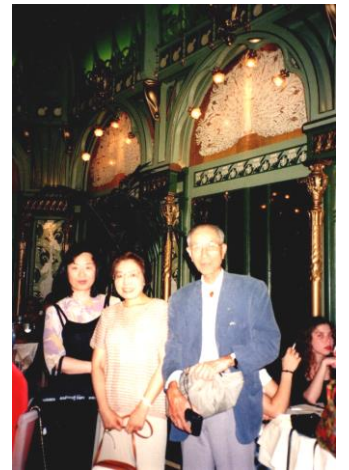
奈良日仏協会入会後はオリヴィエ・ジャメ先生のフランス語講座に通っていました。入会から 2 年後の 1996 年 7 月、2 週間にわたるサン=マロでの夏季フランス語研修に参加しました。会報の Mon Nara に募集案内が出ていたので応募しました。前年まではジャメ先生が天理大学の学生を引率して行かれていたようですが、この年から日仏協会の会員が参加できるようになりました。私を含めて 3 人が申し込みをし、行き帰りの飛行機から、サン=マロ研修前後 2 日ずつのパリ滞在のホテルも 3 人一緒に、すべてジャメ先生の教え子の旅行社の方が手配してくださったように思います。

パリでは自由行動でしたが、食事は 3 人で名の知られたレストランに行ったりもしました(右写真)。そのうちのひとり松元秀之さんは、ほっそりして背の高いダンディーな男性で当時 80 代でしたが、私とは別のクラスでジャメ先生のフランス語講座で勉強されていて、学生時代にフランス文学を専攻されていただけあって、とてもフランス語が達者な方でした。

サン=マロでは駅に到着すると、ホスト・ファミリーが迎えにきてくれていて、3 人ともそれぞれのステイ先に引きとられていきました。家ではホスト・ファミリーのご夫婦とフランス語でコミュニケーションするいい機会になりました。家から城壁内の学校まではバスで通いました。クラスにはいろんな国の人が入って、そうした人たちとの交流も楽しかったです。

学校からの遠足で、モン・サン=ミッシェル(右写真)にバスで連れて行ってもらいました。潮の満ち引きが速くて、かつては巡礼者が潮に飲まれてしまうこともあったといわれています。私たちがテラスから周囲の海を見た時には干潮で、ずっと先まで歩いていけるような感じがしました。モン・サン=ミッシェルの他に、ディナンや作家のシャトブリアンが住んでいたというコンブール城にも訪れました。

ひとつ忘れられないエピソードがあります。サン=マロでの研修に出かける前のパリ滞在中、訪れた公園で写真を撮ったのですが、カメラをタクシーの中に置き忘れてしまったのです。サン=マロではインスタント・カメラで写真を撮っていました。2 週間の研修後パリに戻ってホテルの人に相談すると、市内の遺失物センターに行きなさいと言われ、一人で出かけて行きました。センターにはいろんな人が訪れてくるせいか金属探知機を通過しなくてはならず、少し緊張もしました。忘れ物の申請をしましたが、結局カメラは戻ってきませんでした。それでも、このフランス滞在中に経験したことは、今となってはすべてが懐かしい思い出です。



「奈良フランス語クラブ」から「奈良日仏協会」へ 川下 裕史 (かわした ひろし)

奈良日仏協会の創立は今から30年前の1994年ですが、私はその3年前の1991年に、当協会の母体となる「奈良フランス語クラブ」に入りました。毎月の例会は、第3日曜午後6時に奈良市中央公民館（現在は中部公民館）の会議室に10~20余名が集まって、月ごとのテーマや自分の関心について有志数名がフランス語作文を発表（エクスポゼ）し、その後で参加者が自由にフランス語会話をするという内容でした。

何かの新聞かチラシでこのクラブのことを知って毎月参加するようになりました（フランス語クラブの活動自体は1987年頃から始まっていたようです）。例会の他にも、数名の有志メンバーでフランス語の雑誌「ヌーヴェル・オブセルバトゥール」を読む講読会をしていました。大学でフランス文学を専攻していた私にとって、フランス語の作文や会話や講読をする機会が得られて、とてもいい刺激になっていました。

例会には毎回多彩なメンバーが参加して、熱気がありました。当時、奈良教育大学副学長の須田紘太さん、元ベルギー総領事館員の鍵本三四丈さん、フランス語講師の仲井秀明さんや高橋節子さんといった方たちが積極的にエクスポゼをされて、毎月の例会を盛り上げていました。とくに仲井さんは精力的に活動されていました。

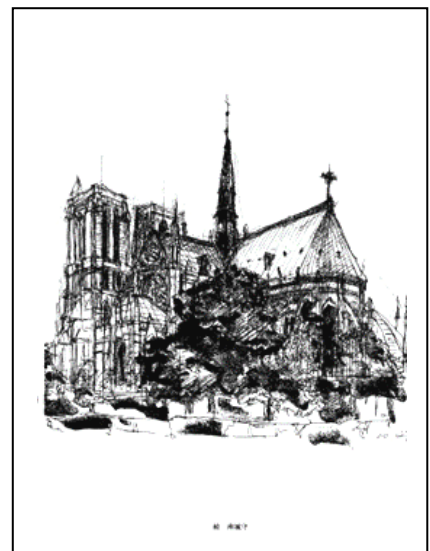
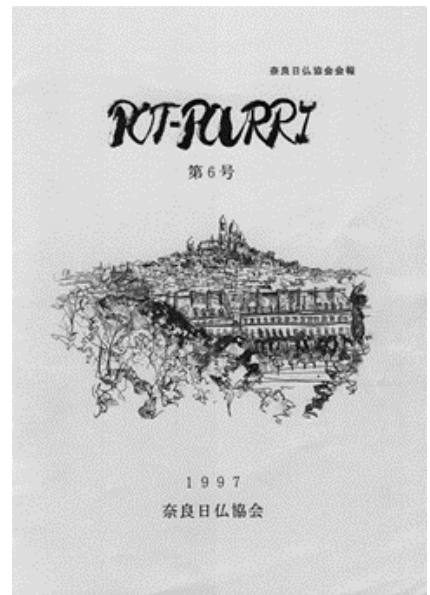
1993年4月、鍵本さんを会長に「奈良日仏協会準備会」が発足し、その事務局のお手伝いをしました。さらに、映画の字幕翻訳家の橋本克己さんを講師に迎えて毎月シネクラブ例会を開催するため、当時フィルム上映のために必要な映写機講習を受講して資格をとって映写技師をつとめました。

1994年4月の奈良日仏協会設立後も、奈良フランス語クラブの活動は続いていました。現在も継続発行されている会誌「Mon Nara」は、もともとは奈良フランス語クラブ内の連絡のためのミニコミ誌として、須田さんの命名で1988年12月の第1号から毎月発行されていた2頁あまりの短冊でした。

途中から、メンバーのフランス語のエクスポゼ一年分をまとめた小冊子「POT-POURRI (ポプリ)」が発行されるようになりました。その名付け親は、フランス語クラブのアドバイザーをしてくれていた当時奈良女子大学のフランス人講師だったジョゼット成内さんです。年1回発行の「POT-POURRI」の中に、月報「Mon Nara」の復刻版が収録されています。

私の手元には、第3号（1990年）、第4号（1991年）、第5号（1996年）、第6号（1997年）が残っていますが、第4号と第5号の間には5年もの年月が経過しています。おそらくその間に奈良日仏協会が設立されて活動内容が広がったために、奈良フランス語クラブの活動のウエイトが減っていたためだと思います。私は須田さんに頼まれて第5号と第6号の編集をしましたが、第3号と第4号の冊子に比べるとだいぶ薄くなっています。高畑町にある須田さんの大学の研究室にワープロで編集した原稿を届けて少し一緒に作業をし、最終的には須田さんが印刷会社に届けてくれていました。

第3号～第6号をざっと見返すと、画家の南城守さんがパリの風景を描いたデッサンが目をひきます。南城さんは奈良フランス語クラブ発足時からのメンバーで、パリに滞在していたときのスケッチが「POT-POURRI」の表紙や扉を飾っています。とくに第6号（1997年）の扉の「ノートルダム大聖堂」の絵が印象的です。2019年4月の火災で焼け落ちてしまった尖塔が画面の中心にあり、空に向かって垂直に伸びているさまが力強く描かれています。貴重な記録にもなっています。



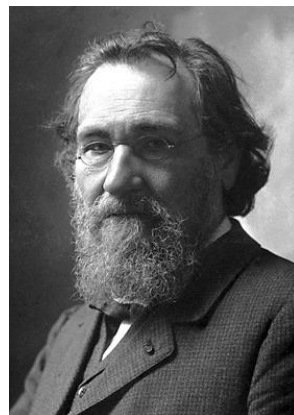
随想「19世紀の科学とメチニコフ」

角田 茂 (つのだ しげる)

私は19世紀の科学史を学生に講義する時、まず初めに次の公式を黒板に書いている。

(石炭) = (コークス) + (石炭ガス) + (コールタール)

19世紀になると、良質な鉄を生産するため、高温の得られるコークスが使われるようになった。製鉄業を中心とする重工業の発展により、フランス革命100周年を記念して、1889年、ギュスターヴ・エッフェル (Gustave Eiffel: 1832-1923) によりエッフェル塔が建設された。良質な鉄の製造は、鋼鉄製のピアノ弦と铸铁製のフレームを発展させ、ピアノは大きな音が出るようになり、市民を対象としたコンサートホールが各地に建設され、ロマン派の音楽家の活躍する舞台となった。また製鉄工程において、炉の中で調節される高温度は、当時すでに、熱放射で発生する光の波長分布により測定されていた。この熱放射の研究から、1900年、マックス・プランク (Max Planck: 1858-1947) は量子仮説 ($E=h\nu$) を提唱し、量子力学の基礎を築いた。製鉄所で発生した石炭ガスを利用したガス灯が、ロンドンやパリに出現するのも19世紀のことである。



最後に残ったコールタールの分留により、ベンゼン環を持つ多くの有機化合物が発見され、有機合成化学や医学の発展に寄与したのもこの時代である。19世紀の後半になると、多くの合成染料が出現し、基礎医学において生体染色を用いた動物実験が多くなされた。細菌学者ハンス・グラム (Hans Gram: 1853-1938) は、細菌を2種類に分類するグラム染色を、1884年に考案。細菌学者パウル・エールリッヒ (Paul Ehrlich: 1854-1915) はウサギにアニリンを静注、その後、解剖した脳が染色されていないことを確認し、1885年に血液脳関門を発見。微生物学者イリヤ・メチニコフ (Ilya Mechnikov: 1845-1916 仏) は1892年、血球細胞の中に貪食作用 (仏: phagocytose, 英: phagocytosis, メチニコフの命名) を有する細胞の存在を発見。これらの研究を通して基礎医学は大きく進歩した。また臨床医学に貢献したものとして、解熱鎮痛薬のアセチルサリチル酸がバイエル社で合成され、『アスピリン』として商標登録されたのも1899年である。

メチニコフは1845年、ロシア (現在: ウクライナ) のハリコフ (現在: ハルキウ) でユダヤ人家庭に生まれた。ハリコフ大学卒業後、1872年、オデッサ (現在: オデーサ) 大学の動物学の教授となり、1886年、同大学にロシア初の細菌学研究所が設立されると所長となる。1887年、パストゥール研究所が設立されると、彼は招聘され研究室が与えられた。1892年には、生体染色技術を用い、血球細胞の中に貪食作用を有する細胞が存在することを証明し、大食細胞マクロファージ (仏: macrophage: マクロファージュ) と小食細胞ミクロファージ (仏: microphage: ミクロファージュ) と命名した。現在、前者は単球と呼ばれ、後者は好中球と呼ばれている。ただし、現在でも血管外に出て活動している単球は、マクロファージと呼ばれている。

体内に細菌やウイルスが侵入すると、マクロファージはこれらを貪食し、抗体産生のために抗原を提示すると同時に、IL-1 (仏: interleukine-1, 英: interleukin-1) を分泌する。このIL-1のシグナルはT細胞に対して、提示された抗原に対する抗体をB細胞に作るよう命令するもので、その結果、B細胞が細菌やウイルスに対する抗体 (免疫グロブリン) を産生する。IL-1のシグナルはT細胞を介してのこのような抗体産生プロセスに関与するのみならず、脳幹に働きかけ発熱と眠気を指令する。体温が上昇すると化学反応速度は上がり、抗体産生速度が上がる。また抗体産生にはエネルギーが必要であり、エネルギー節約のためには睡眠が必要である。風邪をひき、発熱して眠くなった時には、ウイルスが悪いことをしているのではなく、自分のマクロファージが頑張っていると思わなければならない。解熱鎮痛薬はマクロファージの働きを抑える作用があり、風邪をひいた時、熱を下げず、水枕で寝るということは、欧米では行われていないので、東洋の知恵かもしれない。しかし、最近ではマクロファージが頑張りすぎる病態も発見され、新型コロナウイルス感染症において、特に問題となった。

メチニコフは1908年、食細胞の研究を評価され、エールリッヒと共にノーベル生理学・医学賞を受賞した。ロシア出身の科学者としては、パヴロフ (Ivan Petrovich Pavlov: 1849-1936) に続いて2人目の受賞である。ブルガリアにおける長寿の研究を通して書かれた『楽観主義的試論 (Essais Optimistes: 1907)』では、ヨーグルトが腸内フローラを改善して健康に寄与することが述べられ、ヨーグルト不老長寿効果説のバイブルとなっている。

ロマン主義の作家ヴィクトル・ユゴーは『レ・ミゼラブル』の序文で、「地上に無知と悲惨とがある限り、このような性質の書物も無益ではないだろう」と言った。私は人類を無知と悲惨から解放しようとする行動をロマン主義的と考えている。そのような意味で、19世紀の科学はロマン主義的であった。ところが20世紀は戦争の世紀となり、科学者は戦争に協力してしまった。1918年、空中窒素固定法でノーベル化学賞を受賞したフリッツ・ハーバー (Fritz Haber: 1868-1934) は、その代表で、毒ガスを開発し、彼の妻で化学者のクララは、これに抗議して自殺をしている。

バルテュスとの再会～30 数年の時を経て 竹下 明江 (たけした あきえ)

長い間わたしには探し求めている画家がいた。大学に入学した年の夏休みだったろうか、絵に詳しい友人たちに誘われて京都の美術館へ行ったのだった。それはわたしの知らない画家の美術展であった。

朝から照りつける厳しい日射しの中を歩くうちに目がくらみ、途中で休まなければならなかった。冷たい飲物で息をつくわたしの横で友人たちは鑑賞への期待に興奮していた。いつの頃からかその時の記憶はひどくあやふやなものになってしまった。ただ一枚の絵だけは時折ぼんやりと脳裏に浮かび上がることがあった。

それは展示された作品の中で最も大きなものでサイズにも圧倒されたが、これまで観たことがないような不思議な雰囲気を漂わせていた。大勢の人たちが釘付けになり、そこだけ違う空気が流れていた。まだ成熟にはほど遠い裸体の少女が靴下だけを身に付けてのけ反るような姿勢で縦型ソファからずり落ちそうになりながら眠っている。恍惚とした表情は官能の目覚めを予感させるようなものに見える。

不安定な姿勢ながら何も関与させない自己没入、自己完結の姿。窓際の右側にはその少女の妹だろうか、おかつぱ頭の女の子がカーテンを端へ寄せ部屋に光を入れながら咎めるような視線を少女に向けている。その背丈には不釣り合いなほどの嫌悪感を顕にしているのだ。その絵が油絵だったのか、別のものだったのか定かでない。

展覧会に行くと記念に作品の葉書やカタログを買って帰ったものだが、手元には何も残っておらず画家の名前をどうしても思い出すことができない。手がかりを求めているいろいろな書店の美術コーナーに足を運んでもそれらしい画集は見つからず、発刊リストや美術関係の書籍を調べてもピンとくる名前は出てこない。画家も作品も幻のように消え去ってしまったかのようにだった。

時は流れ、もう画家を探すことすら忘れるようになり、美術展からも遠ざかるようになったある日(数年前のことだが)、小学校の同窓会の案内が無い込んだ。「担任の節子先生も楽しみにされています」という文面になぜか胸がざわめく。「節子」という名前が点滅し始める。何か告げようとしているようだがわからない。結局同窓会は欠席し節子先生に会うこともなく点滅は消えた。

ところがそれからほどなくして、ある偶然が画家との再会を導いたのである。外出先からの帰りに行きつけの書店に立ち寄ったところ、珍しく洋書フェアの特設コーナーが設けられていた。絵本や画集等が平積みされている。コーナーを見回した瞬間、目に入った表紙にはとした。赤いセーターに白いハイソックスの少女が椅子からずり落ちそうなポーズで辛うじてバランスを保っている。これは。ふいにひらめくものがあった。(作品名:《ベンチシートの上のテレーズ》)

震える手で画集を取り上げる。表紙左上に BALTHUS～CATS AND GIRLS～の表記。それは英語の画集だった。ああ、バルテュス、そう、そんな名前だった！突然耳元で友人のささやき声が再生する。「あ、奥さん日本人なんだね、節子のためについてあるよ」。

あの不思議な絵のタイトルは《La Chambre 部屋》(右下画像)、会場は京都市美術館(当時)だった。あの時わたしは確かにカタログを買ったのだ、しかし卒業直前に美術サークルの同級生(なかなかの美男子だった)に惜し気もなくプレゼントしてしまったのである。名前がわかった瞬間からするするとほどけるように記憶が甦る。画集にはリルケ(バルテュスの母は愛人だった)がバルテュス少年の猫をテーマにした40コマの絵からなる作品《ミツ》に感心し書籍化に動いたとある。

ピカソ以降20世紀最後の巨匠と言われたバルテュスは、好き嫌いの分かれる画家である。少女をモデルにした作品の中には「芸術か、猥褻か」が問われ、撤去運動にまで発展したものもある。だが本人には猥褻なものを描いているという意識はなかった。バルテュスの最大の理解者である節子夫人は、彼が92歳で没するまで着物姿で支え続けた。



《夢見るテレーズ》(撤去運動に発展)
河出書房新社『バルテュス生涯と作品』より



《部屋》リプロポート『バルテュス画集』より

霊山寺のバラ園

5月中旬～6月中旬は、自宅の庭や各地の庭園でバラを愛でる機会があった方も少なくないのではないのでしょうか？バラには眺める人の心をなごませ豊かにしてくれる何ともいえない魅力があるようです。

奈良市の富雄川沿いにある霊山寺のバラ園には、200種類2000株のバラが育てられていて、訪れる人を楽しませてくれています。霊山寺は、奈良の大仏建立事業に深く関わった二人のお坊さん（行基菩薩とインド出身の婆羅門僧正菩提遷那）によって、天平時代に創建された古い歴史をもつお寺ですが、昭和32年、第二次大戦のためにシベリア抑留生活を経験した当時の住職が世界平和を願う気持ちから、バラ園が造られました。そのために、平和への祈りを象徴する「ピース」という名のバラがこの庭園の中心になっています。

今年10月下旬、ガイドクラブで本堂の秘仏宝物公開と秋のバラの時期に、この霊山寺を訪れることを計画中です。庭園では様々なバラを愛でることができるでしょう（[下画像は霊山寺のフランス産出のバラ](#)）。また、霊山寺管長の奥様の東山泰子さんは長年当協会の会員として、フランス人との交流活動に貢献してくださっています。詳細はMon Nara 通信8月号にてお知らせいたしますので、楽しみにしてください。



左から：「ピース」「プリンセス・ドゥ・モナコ」「ジュビレ・デュ・プリンス・ドゥ・モナコ」「ピエール・ドゥ・ロンサール」「パパ・メイアン」「ローズ・ボンパドゥール」

法人会員紹介

株式会社 NARA FRANCE

<https://www.narafrance.com/>

2020年5月に、奈良県生駒市に日仏通訳・翻訳、日仏ビジネスサポートの会社、株式会社 NARA FRANCE を起業。17年間勤めていた在日フランス大使館での経験を活かし、現在では行政（大阪市・パリ市）、フード関係（アランデュカス氏、ラ・メゾン・デュ・ショコラ）、大阪・関西万博関係の通訳として活躍中。関西に来日するフランス語圏の企業や団体の商談や会議通訳のご要望ありましたらぜひご連絡ください。また信州大学や奈良女子大でフランス経営学やスタートアップ論、日仏通訳論の講義を実施。月に一度、学園前と西大寺の「住まいと暮らしのぷらっと HOME」でフランス語講座を開講中。2024年4月にはフランスのスタートアップ政策についてのビジネス書「フレンチテック」（KINZAI バリュー叢書）を出版しました。



連絡先：kaoruko.hayashi@narafrance.com
所在地：奈良県生駒市
代表：林薫子（はやし かおるこ）
写真：2023年5月、万博の通訳にて

野菜ダイニング「菜宴」

<https://potager-rice.com/>

コロナ禍をきっかけに始めた物販ですが、『自分の商品を全国の皆様にお届けする』という目標を掲げたものの楽しく苦闘した数年でした。そして新たな挑戦として、4月27日に新商品『海老三郎マヨネーズ』を発売いたしました。本商品の可能性を信じ、にっぽんの宝物グランプリという大会に出場し、地域予選で準グランプリ、その後、全国大会：調味料部門で準グランプリを獲得しました。奈良県のブランド卵『大和なでしこ卵』、静岡県由比漁港の天然桜海老を使用したマヨネーズです。海老三郎マヨネーズよろしくお願いたします。



奈良市小西町19 マリアテラスビル2F
Tel：0742-26-0835 不定休
昼 11:00～15:00 (14:30 ラストオーダー)
夜 17:00～22:30 (21:30 ラストオーダー)
店長：久保田耕基

※法人会員ワインショップ「サン・ヴァンサン」の紹介は、10月号に掲載予定です。（編集部）

奈良日仏協会創立 30 周年記念行事

奈良日仏協会創立 30 周年祝賀会を 11 月 24 日（日）に、奈良ホテルにて開催することになりました。ゲストを迎えての昼食会を計画しています。時間等につきましては、Mon Nara 通信 8 月号にてお知らせいたします。より多くの会員の皆様の参加を願っています。

記念誌「奈良日仏協会 30 年史」（仮タイトル）は、祝賀会の報告記事も含めて 12 月に発行し、Mon Nara 通信 12 月号に同封して会員の皆様にお届けする予定です。現在、30 年前からの会員の方のお話を伺いながら、少しずつ準備にあたっています。お話を聞いて当協会設立の準備段階から多くの人の熱意と協力があつたことを知り、頭が下がる思いです。フランスからの学生や訪問者や定住者との交流活動の下地には、古来から異国の人々との交流を盛んにしてきた奈良の土地の歴史があるのかもしれない。

秋の教養講座（9/22）のお知らせ

秋分の日9月22日（日・祝）に秋の教養講座を開催します。講師はピエール・シルヴェストリさんです。ピエールさんにはこれまで、シネクラブ例会やフランス・アラカルトにて、フランス映画の紹介や解説をしていただきましたが、今年は秋の教養講座で「奈良と私（仮題）」の講演をしていただくことになりました。ピエールさんの仕事は、パリで外国人にフランス語を教えたり、映画や音楽の製作に携わるなど、多岐にわたっています。奈良に暮らしたのは約10年ほどですが、奈良を心のふるさととして今も並々ならぬ愛情を抱いて、コロナ禍の時期を除いて毎年のように「里帰り」しています。そんなピエールさんが、画像や映像の紹介とともにどんな講演をしてくれるのか楽しみです。詳細は、Mon Nara 通信8月号にてお知らせいたします。

〈2024 年度第 2 回理事会報告〉…事務局

日時：2024 年 5 月 16 日（木）15:00～16:45。場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、浅井、菌田、喜多、杉谷、中辻、藤村。議題 1. 会員数確認。議題 2. 3/21 理事会後の活動：(5/12) 第 155 回フランス・アラカルト「古民家と写真を語る」。議題 3. 今後の行事：(6/30) 第 63 回シネクラブ例会『小間使いの日記』、(9/22) 秋の教養講座「奈良と私（仮）」講師ピエール・シルヴェストリ、(10 月下旬) ガイドクラブ「霊山寺バラ園散策」。議題 4. 30 周年記念行事：11/24 記念式典、記念誌 11 月末原稿締め切り。議題 6. Mon Nara 通信 No.18、Mon NaraNo.305 6/17 発送予定。議題 7.その他：次回理事会 7 月 18 日（木）15：00～16：30「菜宴」にて。



編集後記 ☆ 6 月初め頃「ボダイジュ（菩提樹）」が花を咲かせていました。鈴なりに咲く薄黄色の小さな花が木の枝から下向きに垂れさがっているので、この木の下にくと独特の甘い香りがただよってきます。奈良では法華寺、西大寺、矢田寺などの境内にそびえているのを見かけます。お釈迦様がこの木の下で悟りを開いたことが知られていますが、それは「インドボダイジュ」という種類で、日本にもたらされたのは 12 世紀に臨済宗開祖の栄西が持ち帰った中国原産の別種の木と言われています。寺院の境内に植えられていることが多いのは、仏教に関係の深い木だからでしょうか。☆ いっぽう「ボダイジュ」と聞くと、シューベルトの歌曲を連想する方も多いいかもしれません。これはドイツで「リンデンバウム Lindenbaum」、フランスで「ティユール tilleul」と呼ばれるヨーロッパに見られる品種の「セイヨウシナノキ」で、インドや日本のボダイジュとはまた別種の木です。☆ フランスでは街路や公園に植えられているのをよく見かけます。ある年の 6 月初め頃、パリ国際大学都市の日本館滞在時に近くのスーパーに買い物に行くと、いい匂いがするので見上げるとシナノキの花が咲き誇っていました。何年か前の別の季節に何度もそこを通っていたのにシナノキにはまったく気づいていませんでした。花の香りがなければずっと気づかなかったことでしょうか。日本のボダイジュの花に比べると、少し小ぶりですがよく似ています。☆ 紅茶に浸したマドレーヌを食べて、忘れていた子供時代の記憶を取り戻した『失われた時を求めて』の主人公が味わった紅茶というのは、このシナノキの花を乾燥させて作ったハーブティーでした。（N. Asai）

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2024 年 10 月号は **9 月 30 日**が原稿締切日です。
- ◆会員のみなさまで「**Mon Nara**」（2 月、6 月、10 月発行）又は「**Mon Nara 通信**」（4 月、8 月、12 月発行）に**チラシ同封を希望される方は**、1）内容がフランスに関わるもの、2）本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2024 年 6 月号 numéro 305

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司